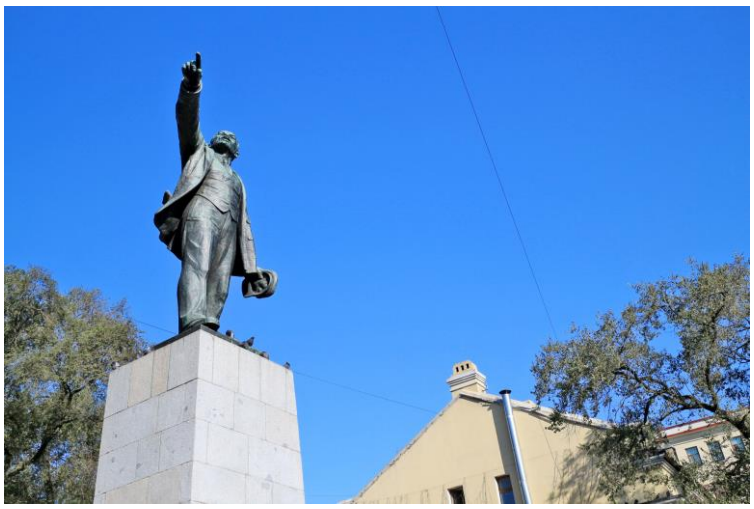
論考

最初のボリシェヴィキ　～ピョートル・トカチェフ（1844―1855）～

掛川　徹

2022 年 1 月



（1）レーニン主義の原型

91 年ソ連崩壊後の世代にとって、レーニンとロシア革命が現代世界にもたらした影響の巨大さは理解し難いかもしれない。だが、既成政党や社会運動が今も引きずる欠陥、短所のいくつかはその起源をソ連型「共産主義」に有する。むろんロシア革命の肯定的な側面も数多くあった。だが、むしろ正面から論じられることの少ないレーニンのマイナス面が現代の課題だとも思える。レーニンとボリシェヴィキの革命は先行するロシアの革命運動を集大成したもので、ロシア革命史に足跡を残した革命家は数多いが、ここでは「最初のボリシェヴィキ」と呼ばれたトカチョフをとりあげ、「レーニン主義」をその原型からたどってみたい。

19 世紀のロシア社会

19 世紀ロシア。皇帝（ツァー）が絶対的権力を握り、選挙や議会は存在せず、思想・言論の自由もなく、秘密警察オフラーナが全国にスパイ網を張り巡らせ、一切の体制批判を取

り締まった。住民の過半は農奴で、彼らを自由にムチ打ちしてこき使う地主の貴族たちは農業近代化の意欲をもたなかった。女性は貴族と雖もあらゆる社会生活から排除され、離婚は法的に禁止、親が認めなければ結婚もできなかった。行政機構や裁判所には汚職や賄賂が横行。西洋近代思想に触れた知識層にとって、ツァー体制の変革、ロシアの近代化は１８２５年の宮廷革命「デカブリストの乱」以来、世代を越えた共通の課題だった。

しかし、１８６１年農奴解放令をはじめとするアレクサンドル２世の「上からの改革」を契機に、もっぱら貴族の子弟からなる旧世代のゲルツェンなど、改革を支持する「改良派」と、没落貴族、官吏、商人や技術者の家庭出身でツァー体制に展望を持てず、「下からの革命」を掲げたチェルヌィシェフスキーら急進派に知識層は分裂。没落地主の家に生まれ、学生運動で揺れるペテルブルク大学に入学したトカチョフも「革命派」の論客として台頭する。70 年代になると、農民教育を通じて漸進的社会改良を夢見たラブロフ(「人民の中へ」運動)と、農民による暴力革命でツァー体制打倒を目指したバクーニンとの間で論争が行われたが、トカチョフは亡命後に発行した『ナバート（警鐘)』誌で独自の立場から「知的道徳的に優れた少数者が人民を指導する革命」を論じた。しかし、当時「エリート主義」と批判されたトカチョフはロシア国内や亡命グループの間でほとんど相手にされず、失意のうちに世を去った。

トカチョフを復権させたのがレーニンである。亡命先のイタリア・カプリで運営されたボリシェヴィキの党学校は古い革命家のあらゆる文献をかき集めたが、レーニンが特に重視したのがトカチョフだった。当時レーニンの秘書で党の図書館を運営したＢ・ブルーエヴィチはトカチョフの公刊物をすべて収集、レーニンは亡命してきた党員全てにトカチョフを熟読するよう推奨した（Ｂ・ブルーエヴィチの回想)。

１９１７年革命の後、ソ連の歴史学者の間で「レーニン主義の原点はトカチョフ」という議論が熱心になされたが、こうした研究は「ナロードニキと非和解的に闘ったレーニン」という党の公式見解に抵触するため、スターリンが議論の打ち切りを通告。トカチョフの著作はソ連の図書館から一掃され、百科事典からその名前は消えた。

「革命は近い」

トカチョフは「ヨーロッパの憲兵」と呼ばれた反動の牙城＝ツァーリズムが実は脆弱で、ロシアの革命は近いと断言する。

「遠くから見ればわが政府は力強い印象を与える。現実にはその権力は幻想であり、想像上のものでしかない。政府は人民の生活に経済的基盤をもたず、いかなる階級の利益をも体現していない … この点から見てわれわれは革命に勝利するより大きなチャンスを諸君ら〔ヨーロッパ〕よりも有している … われわれの国家はいわば空中に浮かんでいるのであり、現存する社会的階層と何の共通項も持たず、その根っこは過去や現在といかなるつながりも持っていない」。

「この未開な大衆」

革命の主力は農民だが、農民が独力で革命に勝利することはない。当時のインテリ層が良心の呵責からつくりあげたロマンチックで理想的な農民像をトカチョフは強く否定した。
人民は「建設的な力としてではなく、破壊的な力としてのみふるまうことができる」。
「人民は嵐のような自然力で … 途上にあるものすべてを破壊し、荒廃させ、常に計算や自覚なしに行動する」。

「ムジーク … この未開な大衆は、激しく抑圧された状態の原因を自覚的に認識するにはあまりにも粗野で無知である」。

「精神的な貧困 … 単調な性格 … 倫理的未熟さ … 大衆はまず何よりも利己主義者である。 … 彼は自らの兄弟と共通の利益や連帯を感じるかもしれないが、仕事や己のパンを失うと知れば同志への支持をとりやめる … 結果として、各々が自らの利益にしたがって行動することで常に全般的利益を見失い、最後は個別利益も失ってしまう。／もし人民を放っておけば、彼らは何も新しいものをつくることはできない。彼らはすでに慣れ親しんだ古い生活様式を拡張するだけである。人民は、指導者がいなければ、旧体制の瓦礫の上に新しい秩序を打ち建てたり … 共産主義の理想を実現する方向に発展することはできない」。

(2)「一党独裁」への道

「少数者の組織」

利己主義的な農民を団結させ、勝利に導くのが「知的道徳的に優れた少数者」の役割である。

「少数者は、考え抜いた、合理的な形式を闘争に与え、闘いをあらかじめ設定された目標に導き、粗野な要素〔大衆〕を理想的な目的に向けて指導する」「革命的少数者はもはや待機してはならず、人民に自覚を強制する任務を引き受けなくてはならない」。

「革命的少数者は … 人民がその革命的破壊力を適用する道を開く … 革命の喫緊の敵を破壊するためにこの暴力を振り向けることができる」。

「少数者」は中央集権的な組織をつくらねばならない。

「革命の成功は、散在する革命的要素の編成と組織的統一が、一つの実体にまで—単一の、共通した計画にもとづき、単一の、共通した指導にしたがって行動することができる、中央集権的だが機能は分散させた組織に結実するかどうかにかかっている」。
革命家の組織はいわば「革命的軍隊」であり、「独自に行動する自治的な革命グループの連合的なつながり」を一切拒否する。そんな組織は革命の役に立たないからだ。

「少数者」の組織は優れた知性と知識によって、全面的な「社会主義的世界観」を保持し、社会全体を統一させる。彼らは一切の世俗的幸福を断ち切らねばならない。理想を否定するようないかなる「喜びや悲しみ、希望や計画、思想や考慮」も「自殺行為を意味する」。

国家が人民を指導する

議会制度を導入したヨーロッパ諸国の労働者のみじめさ、ブルジョアジーの腐敗を知るトカチョフは、民主主義制度に何の信頼も置いていなかった。革命に勝利しても民主制を採用してはならず、「少数者」が指導する国家に全権力を集中しなくてはならない。何が自分たちにとって本当の善なのか知らない遅れた人民、「骨の髄まで古い習慣に親しんだ多数派」の「下からの影響」は革命の目的を危険にさらす。

「少数者」が国家権力を通じて、人民にとって本当の善を強制すべきである。報道、教育その他あらゆる手段によって「未開な多数派の社会的、家族的諸関係を再建」すべきであり、社会主義的な「公安委員会」を設立して革命に敵対的な要素、旧世代を根絶しなくてはならない。

レーニン主義の骨格

わずかな文章を一瞥しても、農民を労働者に置き換えた点を除いて、レーニン主義の骨格はトカチョフ主義だということがわかる。「労働者は独力で共産主義に達することはできない」というレーニンの労働者観はトカチョフの農民観とパラレルだし、「知的道徳的に優れた少数者の指導」は「職業革命家」による「外部注入」論として継承されている。レーニン主義においては、「労働者の自己解放運動」という共産主義運動のそもそもの規定は蒸発しており、労働者農民は旧体制を破壊する力としてのみ評価されている。一党独裁のスターリン主義に帰結したロシア革命のその後の展開は、トカチョフがプログラムしたようにすら思える。

コミンテルンを詳細に検討した元ドイツ共産党員Ｆ・ボルケナウは「レーニンの革命は本質的にプロレタリア革命ではない。それはインテリゲンチャ、職業革命家の『革命』であり、プロレタリアートをその主な同盟者とするものである」（『世界共産党史』）と喝破した。
断っておくが、トカチョフは傑出した革命家であって、ほとんどの民衆は文字が読めない当時のロシア社会で大規模な社会変革を構想した場合、現代的な価値判断を抜きにして言えば、彼の見解はとても現実的だった。その革命論の鋭さとリアリティは、後にこれを継承したボリシェヴィキの勝利によって実証されている。とはいえ、ロシア革命は権力を握った「優れた少数者」が社会運営という点で農民より優れているとは言えないことも実証した。トカチョフ的な社会観は識字率ほぼ１００％の現代日本でも形を変えて生きている。

（出典　A. L. Weeks, The First Bolshevik、1968, D. Hardy, Petr Tkachev, the Critic as Jacobin, 1977）